

### 月田秀子の昨日、今日、明日…

10月6日14時53分発「のぞみ13号」で、35年間住み慣れた大阪を離れた。なんとしてでも見送りに行きたいという嬢を「そういうのって苦手だから」と押しとどめて、一人での旅立ちだった。

慌しく引越し荷物を東京へ送り出し、がらんどろになった鶴橋のアパートの部屋は、やけに広く見えた。そのアパートに引っ越した5年前、近くに真田山公園があるせいか、翌朝、小鳥の声を覚ました私は、ここぞ終の棲家になるのだという感慨で一杯になった。畳の部屋をフローリングにし、綿壁を何度も何度もペンキを塗り重ね、顔中をペンキだらけにして、真っ白の部屋にした。5階と6階の間にあるその部屋を「私の隠れ家」と呼んでご満悦だった。

「人生ってわからないものだ」走り出した新幹線の中で缶ビールを飲みながら一人ごちた。

35年前は、父母と弟、4人での大阪への旅立ちだった。中学の同級生3人が見送りに来てくれた。すべるように東京駅を出てゆく「こだま号」の中で、私と母は号泣した。二人とも浜松近くまで泣きっぱなしだった。嗚咽をこらえる時のあの咽喉の痛みを今でもはっきり覚えている。新大阪に着き、環状線に乗り換え、大阪の町並みを見る頃には、新しい生活に私の胸は膨らんでいた。鶴橋の手前の「玉造」という駅の名前を、「昔、勾玉でも作っていたのかしらん」と思いながら通り過ぎたのを何故かはっきりと覚えている。高校一年の夏のことだった。

「やっとな故郷に帰れる」

長年住んだ大阪の町。生れ育った東京の倍程住んだことになる。青春時代があり、歌手というものになったその町への未練は、不思議となかった。故郷といっても、両親がいるわけでもない、住む家があるわけでもない、うさぎがいる山も、魚がつかれる川もあるわけではない。幼い頃、親に背負われてよく行ったのは道灌山。仕掛けのピンを持って魚をとりに行ったのは荒川。その頃の面影が残っているはずもない。それでも、私にとって、東京は故郷なのだ。

新居は、品川駅から歩いて2分の、立派な14階建てのビルの最上階。北側のベランダからは、聳え立つ高層ビルの合間から、品川駅を発着する電車、浄水場の上に広がる芝浦公園の緑が見える。こんな無機質な都会で気が狂わないだろうか？鳥の声といたら、鳥の鳴き声を何度か聞いた。子供達の声も、酔っ払いの声もしない。ゴーという音がするだけで、車のエンジンの音も、クラクションの音も、ブレーキの音もしない。南側の中庭に面した窓を開けても、空と、閉じられたいくつもの窓が見えるだけ。窓を閉めれば、ほとんど何の音も入ってこない。

パソコンの接続をしにきてくれたK嬢の「こもってばかりいたら老け込んじゃうよ」という一言に、一念発起、引越しの荷物もほぼ片付いたある日、自転車で近所を徘徊してみた。K嬢の言っていた「北品川」まで行ってみた。東海道の旧宿場町だ。スーパーなんてものはない。魚屋、八百屋、船宿まである。船着場へ行くと、屋形船まで繋留されている。人の匂いのする町並みに、人心地着き、豆腐と、道端で老夫婦が焼いている焼き鳥と、鱈の開きを買い、家路に着く途中、急に鮫がつまみたくなり、行きつ戻りつして中をうかがい、思い切って一軒のすし屋の暖簾をくぐった。「らっしゃい。おひとりですかい？」威勢のよい、かといって馬鹿でかくない声に安心して、カウンターに座った。「こはだ」「秋刀魚」「青柳」「いか」「鱈」「大トロ」「甘えじ」「ほっき」「あなご」そして「秋刀魚」をアンコール、一貫ずつ握ってもらった。ああ、江戸前鮫最高！

ポルトガルでのことを思えば、日本語は通じるし、何の不安もあるはずなのに、夜の町の徘徊は、控えている。原因は金欠病。夏から10月まで、ほとんど仕事らしい仕事が無かったし、大阪の3倍以上の家賃がドンと肩に重たい。幸い、11月は、マカオ観光局の仕事が立て続けに4件入ったので、なんとか食いつなげそう。

それよりも、五木寛之さんとのコンサートのチケットの売れ行きがもう一つなのが頭痛の種だ。特に、大阪が俄然少ない。五木さんも、サンケイホールを一杯にしようねと言ってくれたのに。大阪を離れたのが原因だろうか？6000円というチケット代のせいだろうか…？と言いつつも、離れていてはどうにも出来ない。ポスター、チラシを持ってちよいと自転車で大阪まで行くわけには行かない。「隔たり」は、人の心に、熱く郷愁をおぼえさせたり、冷たくあきらめさせたりする。

### <井上青龍遺作写真集「北帰行」>

北朝鮮へ拉致された人たちの一時帰国のニュースで、持ちきりだ。人間の尊厳と自由を奪うことに、正当性などどんな状況であれあろう筈がない。それに類したことを自分はしていないだろうか？それに荷担するようなことをしてはいないだろうか？そう思いながら、24年ぶりの祖国での再会に感涙する人たちの姿を見る。

引越しの荷造りをしている時、「北帰行」という写真集が出てきた。出版に関わったのが、故黒田清氏、俳人の木割大雄氏(当フアド倶楽部の会員でもある)である。1994年9月井上氏の七回忌を機に出版された写真集だ。故黒田氏が、日刊スポーツに連載されていた「ニュースらいだー」の文を、紹介したいと思う。

### <北帰行>井上青龍さんの幻の写真集が出版!

「北帰行」と言うタイトルの写真集が出た。

六年前の夏、亡くなった井上青龍さんが、1965年ごろに在日朝鮮人の北朝鮮への帰国の表情を撮った写真が、死後に発見されてそれがやっとなまとめられたのだ。

井上青龍さんは、大阪のカメラマンで、いまの愛隣地区、昔の釜ヶ崎に住み、その境界の人たちを撮り続けたことで知られる。生前、釜ヶ崎に続いて、創価学会、在日韓国・朝鮮人、奄美をテーマにしていたドキュメンタリー写真家である。最後は、八月の徳之島の海で撮影中、高波にさらわれて亡くなった。

ある時期、在日の人たちの北朝鮮への帰国の表情を、井上さんが撮り続けていたことは、友人達が知っていた。

通夜のこと、「青龍さんのあの写真はとうなった」と話題になった。しばらくして、内弟子だったカメラマンが「あの撮影に新潟に同行したのは私です」と語ったが、その写真がどこにあるのかわからなかった。

井上さんは、その写真集を一部だけ、手作りで残していた。奥さんの治子さんがそれを発見したのは、三年前の秋のことだ。すぐに友人の木割大雄さんのもとに駆けつけた。木割さんは、通夜の席で「夏怒涛誰に問うべき命かな」と詠んだ俳人でもある。木割さんと治子さん、それに井上さんの友人たちが、なんとかこの「幻の写真集」を出そうと言いつつ、三年かかった。42ページ、2千円、三千部。それだけの写真集を出版する資金がなかったからである。

やっとな陽の目を見た幻の写真集のページを繰った。

1959(昭和34)年に第一次帰国船が新潟港を出国して以来の帰国者は十万人にのぼった。これは両国の赤十字社の協定によるものだが、北へ帰る希望と別離の悲しみが交錯した帰国者たちの表情を、青龍のレンズがしっかりと捉えている。

<この記録は、大阪駅から新潟の収容所への道程と、一週間近い収容所生活を経て新潟港より北朝鮮のチョンシンへの出港までの写真記録である。若い人たちの希望に満ちた顔と共に、帰国の覚悟を決めて新潟まで来たのに、子供のとき以来のまったく未知に等しい祖国に死に帰るだけの祖国に一抹の不安をのぞかせる老婆に、在日三世代の複雑な心境を垣間見る想いでいっぱいだ。南と北、更に日本にと、二重三重に引き裂かれてゆく民族の宿命を、如何にみるや。如何になすべきや>

青龍はこうメモに書いている。

今、北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)は、国際社会の波間で大揺れに揺れている。青龍は三十年前、すでに、在日の人々の心の中にある哀しみを見つめていたのだ。

ジャーナリスティックなカメラマンの冥福を祈りながら。

(1994年9月18日 日刊スポーツ「ニュースらいだー」 黒田清)

日本、韓国、朝鮮、様々な国境を越えて、いわゆる国家の利害に翻弄された人たちのいることを、忘れてはならない。そんな想いで、8年前の、黒田さんの記事を紹介させていただきました。



## きうぴいライブレポ

専属歌手月田秀子のレポ第三弾、今回はなんと能楽堂である。能楽堂でファド？一体どんな・・・？会場の明かりが消えると、そこは宮沢賢治を交える不思議な世界でございました。

### 月田秀子Dramatic FADO Live

開催:京都 2002年9月14日(日) 大江能楽堂

#### 波のための闇 闇のための波

日本のファド歌手月田秀子と宮沢賢治の詩の世界。魂の叫び、叶わないものへのせつなさ、孤独。やるせなさ。かすかに見える明日。言葉にするとたんに平面的になるが、結びつくには感じられる。ファドは音楽、賢治は文学。相容れそうに感じられるものの、昇華されるにはある程度の時間を要する組み合わせである。このシリーズには今回で3回目だそうだ。

能舞台というまた異質ながらある意味相容れる可能性を秘めた場所を今回選んだことは、月田秀子の新たな挑戦であった。まずその試みは立派だったといえよう。

舞台には賢治が登場し、月田秀子が登場し、賢治の妹トシ子になった月田秀子も登場し、ギタリストたちが空間をさりげなくまとめている。

まず驚かされたのは初めに登場した月田が髪をひとつに束ね、何枚かの衣装の上に内掛けをはおっていたことである。負の美学で成り立つ能舞台にひとときははえる内掛け。舞台のなかの月田の位置をたたせる色鮮やかなその衣装は、「何が起ころのか」とオープニングでひき付ける力は十分だったと思われるが、肝心のファド歌手に息吹を与えるのには少々てこずったようである。

主役はファドであり、歌であり歌い手である。マイクなしでとどろきわたる月田秀子の声は豊かで深いものであったが、なにか戸惑いと手探りの状態であり、総体的にいて、本領は発揮していなかった。そういう意味では今回はファドも月田も残念だった。彼女の売りであるいい意味でのオーバーヒートにエンジンがかかったのは舞台前半、内掛けを取ってしばらくたってから。それで少し安心することができた。賢治は月田の歌が終わると語りだす。まぎれもなく宮沢賢治である。誰も一度は努力してみるものにとてつもなく難解な、出口なしの世界だ。

「私」から「だれのものでも」なくなるファドの世界と「世界」から「私」に還元される賢治の世界。ファドという波が押し寄せた直後に溶け合おうとする闇の世界。闇がもっとも強い叫びを発したとき静かに訪れる波。ファドという、異国の言葉を持つ波が日本の伝統芸術である能の舞台に寄せては返す。月田がときに囁き、叫ぶ。叫びが最も力をもつ瞬間は、闇という間に溶けるそのときだ。闇という沈黙、沈黙なくして叫びはありえない。そして波が生まれる前にきこえる、沈黙という叫び。そこで、あらためてこの舞台の主役は何かと考える。それはファドである。「ドラマチック」ファドライブである。

正直いって賢治の世界が少し饒舌すぎた感がある。実際宮沢賢治は沈黙の詩人ではない。が、溢れるものを闇に研ぎ澄まし、波と囁みあわせる作業がもう少し必要だったのではないだろうか。

二つの世界が真の意味で噛みあうには、少しの間が必要である。ファドと賢治は、まだ噛みあうまでに必要な隙間が、足りなかった気がする。次回その隙間が自然に生まれるよう期待したい。

# cartas

●東京に帰られるとのこと、残念ですが潮時でしょう。人生のある意味でピークに達した時に、五木寛之氏とジョイントコンサートを組めるほどの歌手が、人に知られることの少ない大阪にいては、宝のもちぐされです。今までより以上の人たちにファドを聞いてもらえる機会も増えるでしょう。ファンの一として、拍手で見送りたいと思います。大阪、京都のライブは今までとどりに続けられるとのことですが、新しい仕事を優先的に受けてゆくほうが、月田さんの経済のためにも新しいファドファンを増やすためにも正しい判断になると思いますが、従来のように出演日を調整しながら、なんとか関西でのライブを息永く続けてください。(大阪・I.T夫)

(もちろん、「アートクラブ」「三裕の館」「巴里野郎」のライブは続けます。一人でも多くの方に聞きに来てもらいたいな。最近、お客様が少なく、ギャラもダウンしてしまいました。まあ、これは、私のステージングの問題かもしれませんが。)

●多くの偉大な音楽家達…モーツァルト、ショパン、ベートーベン、マイルス・デイビス、バド・パウエル…彼らは何度も引越しています。月田秀子の新しい門出を祝しシャンパン!といきたいところですが…。スコットランド名物を!(家出をいれて、16回目の引越しになる。何故かそのシーンをそれぞれはつきり覚えている。歳が行くと結構こたえるけど、新入生のような緊張と期待の混ざった心で、新しい町を徘徊するのもおもしろい。この新鮮な心をいつまで持ちつづけられるかな…?今、スコットランドにいる馬ちゃんから、自宅前でエピソード帖のコラムを書いている写真と共に、スコットランド名物「SHORTBREAD」が送られてきた。これがまた、シングルモルトウイスキーに合う!ありがとう。)

●月田さん今晚は、早速ですが、ちょっと手前味噌かも知れませんが、「大江能楽堂」ライブをご覧頂いた方々から当方に頂戴しました有難いメールの中、一部をご紹介させて頂きます。概ね好印象を持たれたようですね。こちらの知り合いということ差っ引いても、月田秀子さんの魂の歌声には、そしてファドには、皆様魅了されたようですよ。これをキッカケに、ファド・ファンが、そして月田秀子ファンが益々増えることを願っております。(坪倉 謙之)

<http://www.kawachi.zaq.ne.jp/dpbqx305/kenji-page1.htm>

★件名:ファド・コンサート万歳!

能舞台とそれにあわせての照明。月田秀子さんのファドと竹崎利信さんの「賢治」の語り溶け合って、独特の世界に誘ってくれました。「けはれしも やすらかなるも ともにわがねがいならずや なにおやおそれん」(ハムレットより)

橋掛りでの月田さんは(「能」における「橋掛り」、「歌舞伎」における「花道」というのはすごい発明(?)ですね)それこそ月光の下で月に向かって歌い語っているように思われました。深い余韻の残る舞台でした。

★件名:月田秀子ファド・ライブ

月田秀子という歌手を知らない。ファドのことも知らない。ライブを能楽堂で行うなんて、どういうことか。これって実に革命的な出来事ではないか、と思ったが、能楽という演劇と音楽を演じる場所であるに違いない、中国から伝来の芸能である能楽を演じる場所であるから、今、ポルトガルの歌を劇的にライブされることは、全くならおかしくはない、と納得しました。能楽を理解し、自由自在、融通無碍な構成・演出に、坪倉謙之の精神に触れた思いがした。これは単に、ファッションショーを能楽堂で開催することは異なったものである、ことは言うまでもない。

私は宮沢賢治を知らない。「雨ニモ負ケズ」を聞いたことはある。「銀河鉄道の夜」を読んだことはある。彼は「そういうものになりたい」願望を持っている。その彼に坪倉謙之は心酔し敬愛していると思われる。今、私は何らかの願望を持ち、理想を掲げているだろうか。人は、いかに生きるべきなのだろうか。人は、人の幸せのために生きねばならない。私は、「するべき」「ねばならない」を忌避しているのか。私は、「生死」について考えたことがあっただろうか。

月田秀子という歌手はたいへん魅力的な女性でありました。

(9月の大江能楽堂での「Dramatic FADO LIVE」の演出の坪倉謙之氏宛に届いたメールを少しご紹介させていただきました。ファドを、月田をはじめて聴かれた人たちの率直な感想が嬉しい。)

# ficção

読切連載

秀子のエピソード帖 一網タイツの秀子はいかが? -

内間 天馬

1970年7月。終結に向かいつつあるとはいえ、未だ大学紛争に世の中騒然としていた頃。春に上京し、大学生となった僕は、ある日(沖縄デーだった思う)、かねてより憧れていた作家の講演を聴くために渋谷公会堂にいました。壇上、数名の著名人の中に、彼、五木寛之さんを見つけた僕は、少なからず興奮しておりました。というのも、大阪で浪人生活を送っていた頃、彼の作品を貪るように読み、その中で自分に未知な新しい何かを見つけたような気がしていたからなんです。貧乏学生時代の彼のマネをして、下宿で洗面器を鍋代わりにスキヤキを食った仲間の中には、やはり五木作品の影響を受け、シベリア鉄道に乗り、北欧を目指した奴もいたっけ。「アラシネ」と言う言葉を知り、フアドの存在を知ったのも五木さんの作品からでした。後年、月田さんと初めてお会いした時、「フアドって、ニワトリの首を締めた時の断末魔の叫びみたいな歌じゃないんですか?」なんて五木さんのエッセイの受け売りをしたものです。彼女は「なんじゃそれ!?!」ってな顔してたけど…。

さて、その日の五木さんのお話は身最良を差し引いても素晴らしいものでした。後年、寺山修二、立松和平のご両人ともとも三大方言作家と称されたようですが、なんて話の上手な方

なんだろう、というのが僕の率直な印象でした。語り口の純朴さと、その話の面白さ、流れのスマートさ、一見矛盾している点が印象を深くしている所以でしょうか。さんざん話を盛り上げておいて、「さて、皆さん、ここから話はあぁなってこうなって、ますます面白くなってゆくのですが、時間がきましたので、これで終わります」と、会場の大爆笑を誘って話を終えられたのを今でもよく覚えています。ほぼ同じ頃、「僕の作品の基本はエンターテインメントです。云々…」と書いておられるのを思い出すにつけ、人を楽しませるサービス精神を十二分に心得ておられる、唯我独尊とは対極にいられる方だなあ、と実感しました。

さてさて、そんな五木さんが、なんと、月田さんの年末恒例のコンサートに参加してくださるといふ。皆さん、これはもう間違いなく楽しめますよ。上に述べた如き経験を持つ僕としては、今から大変楽しみにしてるんです。五木さんは、作家になる以前から、CMソングや流行歌の世界に深くコミットしてこられました。♪石灯油ポッカポカ…♪や、♪日本盛はよいお酒…♪など、これ以上はないと思えるシンプルなおコピーは、なんとなく彼らしい気もするんですが、なんと言っても、松阪慶子さん主演のTVドラマの挿入歌「愛の水中花」はヒットしましたよね。ホラ、彼女が網タイツ姿で歌うシーン、ゾクゾクしちゃって…。

だもんで月田さん!せっかく五木さんが参加して下さるんですから、ぜひ「愛の水中花」歌ってほしいなあ。もちろん、黒の網タイツ姿で…。エッ、ダメ?恥ずかしいって?そんなこと言わんと、ネッ、お願い!!ゼツタイ笑わないから、ネッ!

(笑われるより、泣かれる方がつらいよ。月田)

# fados canções

## 叫び

訳詞: Caldo Verde

沈黙

この沈黙こそ私の叫び  
全身であげる悲痛な叫び  
涙の流れるままでいよう  
暗闇から暗闇へ  
わずかに見えていた空も  
暗闇から暗闇へ  
今や何も見えない  
天よ  
ここには光が射さない  
星のきらめきも届かない  
取り残されて日を送るとき  
嘆きはさらに深まる  
そして  
天から見放された私は  
世間からも見捨てられて  
今はただ涙を流す  
死んだ者は泣くこともないのだから

孤独

それだけで全てではない  
いつも連れだってくるのは  
深い苦悩  
ああ 孤独よ  
もしサソリだったら  
ああ 孤独よ  
頭を刺して  
さようなら  
もはやどこにも居場所はなく  
残されているのは死だけ  
私は壁に映った  
哀しい影法師  
さようなら  
緩慢に続く人生よ  
死よ そんなにじらさないで来ておくれ  
ああ 何という苦しさ  
狂いそうなほどの孤独

## GRITO

Letra: Amalia Rodrigues  
Musica: Carlos Goncalves

Silêncio

Do silêncio faço um grito  
E corpo tudo me dói  
Deixai-me chorar um pouco  
De sombra a sombra  
Há um céu tão recolhido  
De sombra a sombra  
Já lhe perdi o sentido  
O céu  
Aqui me falta a luz  
Aqui me falta uma estrela  
Chora-se mais  
Quando se vive atrás déla  
E eu  
A quem o céu esqueceu  
Sou a que o mundo perdeu  
Só chorro agora  
Que quem morre já não chora

Solidão

Que nem mesmo essa é inteira  
Há sempre uma companheira  
Uma profunda amargura  
Ai solidão  
Quem fora escorpião  
Ai solidão  
E se mordera a cabeça  
Adeus  
Já fui p'r'além da vida  
Do que já fui tenho sede  
Sou sombra triste  
Encostada a uma parede  
Adeus  
Vida que tanto duras  
Vem morte que tanto tardas  
Ai como dói  
A solidão quas loucura



# informação

- 月田の引越しに伴い、ファド倶楽部の事務局も東京へ移転しました。事務局のお手伝いをしてくださる方を探しています。お気軽に事務局までメール、お電話ください。

新住所:〒108-0075 東京都港区港南1-8-27 日新ビル1406号  
TEL / FAX 03-3458-9806 E-mail : deco@fado.jp

- 『五木寛之・月田秀子ジョイントコンサート2002』のチケットお申し込み受付中です。皆様お誘い合わせの上ご来場くださいますようお願いいたします。

お申し込み方法: 郵便振替にて、備考欄に会場、枚数をご記入の上、お申し込みください。

郵便振替口座番号 00990-6-18440  
加入者名 月田秀子ファド倶楽部  
チケット代金 6千円(全席指定)

チケットお申込締切日: 11月11日 チケット発送予定日: 11月15日

- 会員の高島正博氏が、ご自分の半生を映画と重ね合わせながら綴った『映画と共に』(東方出版:定価1,950円)を出版されました。かなりの力作で、様々な社会現象を通して、映画とともに歩んだ氏の心意気が伝わってくるような気がします。是非お勧めの一冊です。
- 来年一月からの定期ライブの日程が以下のように変更になります。どうか、以前にも増して、ライブに足を運んで下さいますよう、お待ち申し上げております。

第四水曜日: 京都「巴里野郎」 第四木曜日: 大阪「アートクラブ」 第四金曜日: 大阪「三裕の館」

- 10月30日の沖縄での41回目の公演を最後に、全国を巡回したスミセイライフミュージアム「生きる」は幕を下ろします。音楽ゲストは、古謝美佐子さん、山崎ハコさんと、大集合。対談ゲストには渡辺貞夫さんが出演です。五木さん、皆様お疲れ様でした。
- CD「ありがとうアマリア」(3,000円)を、増盤することにしました。

お申し込み方法: 郵便振替にて、備考欄に必ず「ありがとうアマリア」CD代金とご記入の上、

送料(200円)を添えてお申し込みください。

郵便振替口座番号 00990-6-18440  
加入者名 月田秀子ファド倶楽部

## <月田秀子のスケジュール>

10月	2日(水)	大阪・南方「三裕の館」	問合せ: 06-6304-1745
	21日(月)	群馬・前橋「スミセイライフミュージアム生きる」	問合せ: 06-6221-2168
	28日(月)	大阪・心斎橋「アートクラブ」	問合せ: 06-6212-2870
	30日(水)	沖縄・那覇「スミセイライフミュージアム生きる」	問合せ: 06-6221-2168
	31日(木)	京都・四条河原町「巴里野郎」	問合せ: 075-361-3535
11月	5日(火)	福岡・天神「NTT天神ホール」	※問合せ: 082-473-0111
	6日(水)	大阪・南方「三裕の館」	問合せ: 06-6304-1745
	7日(木)	石川・金沢「金沢泉鏡花フェスティバル」	
	9日(土)	長野・小諸「小諸ユースホテル」	問合せ: 0267-23-5732
	10日(日)	長野・諏訪「ハーモ美術館」	問合せ: 0266-73-4116
	11日(月)	名古屋「全日空ホテルズ・グランドコート名古屋」	※問合せ: 052-221-0111
	12日(火)	大阪・淀屋橋「朝日生命ホール」	※問合せ: 06-6343-0111
	13日(水)	東京・新宿東口「紀伊國屋ホール」	※問合せ: 03-3601-4111
	18日(月)	大阪「日本ポルトガル協会例会」	問合せ: 06-6267-6042
	21日(木)	京都・四条河原町「巴里野郎」	問合せ: 075-361-3535
	24日(日)	広島「アビエルト」	問合せ: 082-873-6068
	25日(月)	大阪・心斎橋「アートクラブ」	問合せ: 06-6212-2870
	29日(金)	北海道・札幌「五木寛之ジョイントコンサート」	問合せ: 011-773-0121
12月	3日(火)	大阪・桜橋「五木寛之ジョイントコンサート」	問合せ: 06-6345-5062
	6日(金)	東京・新橋「五木寛之ジョイントコンサート」	問合せ: 06-6345-5062
	7日(土)	金沢「内灘フェスティバル」	
	26日(木)	京都・四条河原町「巴里野郎」	問合せ: 075-361-3535

<お詫び>12月の「三裕の館」、「アートクラブ」はお休みさせていただきます。五木寛之さんとのジョイントコンサートの方に、是非お越しくださいますよう。 ※印は、マカオ観光キャンペーンの催しでファドコンサートは一時間らしい予定です。

## <編集後記>

引っ越して2週間が経とうとしている。その間会った知人は2人。ほとんど家に引きこもりっぱなし。明日は、群馬で久しぶりに歌う。歌を忘れたカナリアになっていないことを祈りつつ、おっかなびっくり舞台に立つ。心機一転、東京の事務局助っ人求む!紅葉の便りの舞い込む中、36号一ヶ月遅れでお届けします。(月田)

月田秀子ファド倶楽部ホームページ  
<http://www.fado.jp/>

■月田秀子ファド倶楽部ジャーナル 第36号  
■2002年11月1日発行(季刊:年4回発行)  
■編集・発行「月田秀子ファド倶楽部」事務局  
■〒108-0075 東京都港区港南1-8-27 日新ビル1406号  
■TEL&FAX 03-3458-9806